

研究区分	教員特別研究推進 独創・先進的研究
------	-------------------

研究テーマ	近代インド宗教史研究と比較文化教育への新聞データベース活用 ——「裾野のDH」の試み				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	富澤 かな
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	富澤 かな

講演題目	新聞データベースの教育利用——量的データに着目して
------	---------------------------

研究の目的、成果及び今後の展望

本研究は、新聞データベースの活用により近代インドの宗教概念の展開を分析するとともに、日本語新聞データベースの教育活用も進めることで、万人に開かれたデジタル・ヒューマニティーズ(DH)の可能性を考え、「DHの裾野」の拡大を目指すものである。

現在DH研究は進展しつつあるが、理解・活用できる研究者は限られており、新たなデジタル・ディヴァイドが生じている。高度なDHの進展は重要だが、同時に、特殊な知識がなくともデジタル技術が活かされる局面を増やすこと、つまり「DHの裾野」を広げること、さらに重視されるべきである。そこで本研究では、新聞データベース(以下DB)の研究・教育利用可能性に着目している。複雑なプログラムによる解析や可視化ができずとも、DBの有効活用ならば、ほぼすべての研究者に開かれたDHの入口となると期待できる。しかし現在、DBの簡単で有効な活用方法は必ずしも研究・共有されておらず、多くの人文社会系研究者にとってDBは便利な検索機能を持つ紙媒体の代替物という位置付けに留まっている。しかしDBからは、紙媒体では得られない量的データも取得できる。本研究ではこの点を重視し、自らの近代インド宗教史研究と、比較文化教育への活用を進めている。

データベースに着目するもう一つの意義は、研究環境の見直しと再考にある。通常の紙資料はILL(図書館間相互貸借システム)が利用できるが、有用なDBの利用権を持つ研究環境は一部の研究者にしか開かれていない。背景には多くの学術機関が直面している資料経費の不足とともに、学術出版全般の苦境、DBの、特に「ウォークインユーザー」の利用権に関する契約の慣習など、多様な問題が関わっている。本学でも、基本的なDBの一つである朝日新聞の『聞蔵』の契約を維持できなくなっており、国際関係学部の有志教員や研究センターの協力や、後援会寄付金で限定的なアクセス権を維持している。2021年度には本教員特別研究推進予算も役立てることができた。特に12月からはアカウント数を二つに増やすことができたため、代表者が担当する学部授業、「比較文化特殊研究B」と「比較文化入門Ⅲ」で、『聞蔵』を用いてDBでしか得られない情報を探すとというテーマを扱った。専門性の高い前者ではDHの動きや申請者の研究例に関する講義の上で課題を出し、入門授業である後者では前者の課題成果を例に簡単な説明を行って課題を出したところ、ハラスメント関連語彙の出現量の変動や特殊詐欺関連の語彙の出現量の変動など、それぞれに興味深い成果が示された。DB利用により、新聞という情報源を、質的データに加え、量的データのソースとしても活用できること、加えて、「読みたい記事を探す」使い方をこえて、新たな問いや課題を発見するツールとしてもDBを活用できることを、学生自ら発見・実践したもので、貴重な成果と考えている。